

# 感話 「しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」

(ルカによる福音書5章5節)

※2016年8月20(土)〜21日(日)に開催された駒込キリスト聖書集会・

第2回山中湖の集いのために執筆した原稿をそのまま公開しております(一部、取り消し線、伏字、書き込みによる修正あり)。時系列のわかりにくい箇所、論旨に乱れのある箇所もございますが、何卒ご了承ください。

独立系研究者\* 倉井香矛哉

## 1. はじめに

人生で初めて観た夢の記憶が、いまでも残っている。——正確には、現時点において想い起こすことの可能な、最も古い夢の記憶、と云うべきかもしれない。おそらくは二歳頃の記憶であろう。或いはまた、それ以前にも夢を見ていたものの、すっかり忘れてしまっている可能性もあるかもしれない。とはいえ、僕はその夢の記憶をたしかに持ちつづけてきたし、いまでも時折想い起こすことがあるのだ。

それは、雪の降りつづく、或る冬の夜のことだった。僕は、乳母車か、或いは古い木箱にでも入れられて、うらぶれた路上の片隅に捨てられていた。煉瓦造りの街並は、しだいに雪に埋もれていくばかりであった。しかし、寒さは感じなかった。僕はペランダのような場所から身を乗り

出しながら(奇妙なことに、最初は路上にいたはずが、いつのまにか街を見下ろす場所にいるのだ)、一つ二つと消えていく家々の窓の明かりを美しいと感じていた。……そんな夢である。この夢を、毎夜、僕はくり返し観つづけていた。実際のところ、福岡県北九州市に生まれ育った僕にとって、雪の降る街並は馴染みのある風景とは言いがたかった。だが、この印象深い夢を、僕は何度もたしかに観ていた。見知らぬはずの北国の光景に、不思議な懐かしさを憶えていた。

ところが、ある日を最後に、その夢を観ることはなくなった。最後の日、僕はやはり乳母車か箱に入れられ、路上に打ち捨てられていた。…と、もうすでに真夜中だというのに、しだいに家々の窓に灯りが灯っていくのだ。眼前の景色は、しだいに光に包まれていった。そしてつい

## 第2回「山中湖の集い」 「人生の歩みと信仰」

に、ドアを開けて僕を招き入れてくれた人が居た。その人は、——おぼろげな記憶に拠れば、その人は、母方の祖母の顔をしていたような気がする。

この夢には意味があるのか、それとも、ないのか。それはよくわからない。ただ、この夢の記憶は、その後の人生の歩みのなかで、何度も思いだす場面に出会った。あの風景は何だったのか。現実に見た風景ではない。にもかかわらず、その北の国の風景は、まちがいに僕らの原風景となっていた。

現時点において、僕には二つの故郷がある。実際に生まれ育った福岡県北九州市と、精神的な根を持つ場所としての北海道の札幌である。「人生の歩みと信仰」について考えるにあたって、この矛盾した自己認識の編成されたきつかけについても言及せざるを得ないと思いつたことが、今回の感話をまとめるにあたっての背景にある。——人生の歩みを振り返るにあたって、思いだしたくない記憶、或いは、思いだすだけで苦痛を伴うような体験はある。無論、そのような記憶を持たない者は、或いは（凡庸なニュアンスにおいて）幸福であるかもしれない。僕にとつて、福岡県北九州市で育った半生の前半部分は、基本的に抹消した記憶である。

今年の五月に刊行された同人誌に寄稿したエッセイのなかに、初めて、「僕は、北九州市で生まれ育った」という一文を書きつけた。——僕は、北九州市で生まれ育った。単なる事実を書きつけているだけのよう

に、われられるかもしれない。しかし、この事実を受け入れるまでに、数年にわたる苦悩と自己省察を必要としたのだ。以下、そのことについて書いていくことにしたい。

### 2. 二つの故郷——精神的誕生地としての札幌——

ここ数年、僕は専ら、W. S. クラークや内村鑑三、新渡戸稲造にゆかりのある札幌のことを「精神的誕生地」、つまり、心の故郷と呼んできた。僕が初めて札幌を訪れたのは、二〇一三年三月三日（土）〜二四日（日）のことであり、北海道大学で開催された学会に出席することが目的だった。折しも、精神的な不安定を主な理由として、当時在籍していた大学院を中退する時期にも当たっていた。新千歳空港から札幌へ向かう汽車のなかで白い雪に覆われた風景を眺めながら、また、初めて訪れた北大の広大さに半ば茫然とし、半ば感激を覚えながら会場に向かったことを記憶している。

じつは、その数年前にも北大で催される研究集会に参加しようとして、スケジュールの都合で断念したことがあった。したがって、この「二〇一三年三月三日（土）〜二四日（日）」という日付は、それじたいはまったくの偶然の結果に過ぎない。だが、この一泊二日の研究旅行のあいだに、札幌はすっかり僕の「故郷」になってしまった。——宿泊手続が遅れた関係で「部屋不問」（その日の状況で空いている部屋に通され



生け贄となって怒りを鎮め、ただひたすらに、次の出航の日までを生き抜くのであった。

#### 4. 文学的想像力の危うい目覚め

実際、家庭内の関係性は非常に危ういもので、また、どちらかといえ、家庭内での会話は少なかつたかもしれない。家族のあいだに存在する暗いかげのような断絶を思ったとき、僕はしばしば、「この父親と母親は、ほんとうは自分の実の親ではないのではないか？」という想像をした。むしろ、そうであつてほしい、という願望であつた。ちょうどその頃、或る宮家の内親王の御誕生(ごたんしん)を伝えるTVニュースを見かけた。その、完璧にお膳立てされ、周到に撮影され、また、巧妙に編集された映像によって演出される理想の家族像を目の当たりにして、僕は、これだ!と思った。真つ黒な現実とは、云わば、美しい嘘で塗り固めた理想の家族像によつて書き換えてしまえばよかつた。——ひょっとすると自分は、明治維新、或いは第二次世界大戦の終戦時にこつそりと民間に隠された王族の末裔であつて、いつか、革命の興つたときに迎える者が来るのではないか、——そんな埒もない空想を膨らませていた。

そのような妄想は、一步踏み外せば狂気であろう。しかし、机上の想像力でこのような物語を創り上げるのは、云わば精神の悦楽とも云える

ほどに愉しい時間だつた。僕は部屋にこもつて、自分の妄想を拙い筆致で紙に書きつけるようになった。古典文学にしばしばみられる同種の貴種流離譚は、たちまち僕の好奇心をかき立てはじめた。シンデレラや小公女などの物語には、不幸に落ちた少女がいつか王族に迎え入れられる、といった筋書きがありがちである。或いは、継体天皇や宇多天皇のように、……中学三年生のとき、僕が初めて書こうとした冒険小説「トライナル・ザイ」(未完)は、現代の日本に生活していた中学生三人が、ある日、地球の内部空洞に存在する別次元の世界、——表(陽)と裏(陰)の二つの面をもつ円盤状の世界に迷い込み、彼らのうちの一人が、陰の世界トライナル帝国のザイ王女に代わつて傀儡の王に擁立される(それを二人の友人とともに陽の世界のレジスタンスたちが阻止、奪還する)、という筋書きであつた。その後、高校時代に小説や詩を書きはじめる僕の根源的な動機のうちには、そのような貴種流離譚に対する憧憬がひそんでいたことは事実である。現実の世界に興味など持てなかつたどこかよそよそしい家族よりも、学校よりも、美しい嘘に惹かれていた。

そのような危うい精神的傾向が、まちがいはなく文学的想像力の源泉になつている。そんな僕にも、人生の転換のきっかけがもう一つあつた。それは、聖書との出会いである。

## 5. 聖書との出会い

初めて聖書を読んだのは、小学校の五年生のときだった。ちょうど母親が入院していた頃、付近の浅川中学校の校門の前で、——正確には、生徒が登下校のときに通る、長い階段の下で、——緑色の表紙の『新約聖書』（国際ギブオン協会、口語訳）が配られていたのである。おそらく、配布していたのは高須キリスト教会（日本バプテスト連盟）の方々だったのではないかと推察するが、残念なことに、ほとんどの浅川中学校の生徒たちは、そんなものには何の関心も示さなかった。中学校の前を流れる川、道路沿いの側溝、そして、下校中の小学生たちの遊ぶ草むら、といった場所々に、ページを破られたり、無惨に引き裂かれたりして打ち捨てられた聖書の山ができていた。……そんな聖書のうち、比較的綺麗な一冊を拾い上げたのが、僕の読んだ人生ではじめての聖書である。

とはいえ、聖書の第一印象はかならずしも良いものではなかった。折しも入院中の母親のことを思って、「病気の治しかたが書いてあるのではないか」と期待したのだが、そこに書かれていたことは、ことごとく僕を失望せしめた。そもそも、そこに書かれていることが歴史的事実なのか、虚構の物語なのか、それすらわからなかった。……ともかく、聞きかじったやり方で祈り、病氣平癒を願ってはみたものの、やがて聖書はどこかに抛ってしまった。

その後、母は完治した。そのときは聞かされていなかったが、現代医

学の見地からいえば、余命五年の末期ガンだったということである。母の治療を担当した医師は、いまでも、「なぜ完治したのかわからない」そうである。数年後にこの話をきいて、僕は、あの聞きかじりの祈りをふと思いだした。

## 6. 「聖戦」と挫折

ところが、この一冊の聖書の存在が、まもなく家のなかに波紋を生じた。前述のように、母親の入院していた頃のことである。父親は急遽帰国し、当時小学生だったぼくと中学生の姉のために家事をすることになった。そのうちに発覚したのだが、父方の一族のうちに、某仏教系新宗教に熱心に帰依していた人がいた、ということであった。そのことに遠慮して、聖書を読むのは辞めてほしいという圧力がかった。

しかし、僕はそれを神勅だと感じた。やがて僕は、神道に篤く帰依するようになっていった。その動機はきわめて不純だった。父親の好きなものは、僕の嫌いなものだったし、父親の一族に関係するものは、すべて悪であった。すなわち、父親の一族に関係していた××××を攻撃することが、僕の人生の至上命題になっていったのだ。そのための思想的攻撃に役立つものであれば何でもよかった。それはけっして学問的な探究などではなかった。「父親の一族と同じ名字の人間を地上から根絶やしにしたい」とさえ思っていた。最早、正統も異端もなく、一方的に攻

撃し、否定し尽くすための非合理的論理を構築していくばかりだった。

しかし、父親の物理的な暴力に対抗するにあたって、自分もまた物理的な暴力に頼ってしまうことは忌避した。けっして非暴力の思想を持っていたというわけではない（小学五年生の段階で聖書を読んでいたから、その影響がまったくなかったわけではないかもしれないが）。父親に関係するものはすべて悪であったから、僕自身が父親に対抗するにあたっては、父親と同じ直接的な暴力に頼るわけにはいかなかった。その代替手段として採用したのが、それは、美しい嘘、——つまりは文学的想像力に外ならなかった。僕は、美しい嘘を並べることで現実を書き換えることを企てた。そして、文学のための文学、表現のための表現に傾倒していった。

しかし、そのような不純な動機に基づく企ては成功するはずがない。僕の書く言葉はどこかあやうげで、大学の教員からは奇異とされた。そのうちに自分自身が人生に迷い、精神を病み、やがて大学院を退学することになった。そのときに親からの経済的支援を受けて、何かを悟った。情けない話である。父親に対抗するために取った文学的創造力への傾倒は、現実の世界にあつてはまったくの無力であった。そして、助けられたのは経済的支援であった。それはつまり、父親が船員として稼いだお金である。

僕は、自分自身の聖戦に敗北した。すべては幻だった。美しい嘘は、現実の前にはまったくの無力であった。砂糖菓子の弾丸では現実を撃ち抜けなかった。

しかし、傷心の僕を、あるとき、札幌の街は無口にも迎え入れてくれたのだ。そうだ。それは、いつか観た夢の風景にどこか似ていた。だから、僕は札幌を故郷とすることにした。もちろん、これも一つの美しい嘘である。いかに破壊的な挫折を経験しようとも、けっきょく虚言を弄する僕の傾向は治らないらしい。ただ、ひとつだけ学んだことがある。夢と現実とは矛盾しあうものではないし、創作に対する情熱は日常生活を守ることとも不可分である。もはや大学院の学籍を失った僕には、残務処理のような日々があるばかりである。しかし、それは存外苦痛ではない。思想的な敗戦は、たしかに僕の精神を新たにした。

## 7. まとめ

最後に、この感話の表題に選んだ聖書箇所を引用したい。

「そこでイエスは、そのうちの二艘であるシモンの持ち舟に乗り、岸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして、腰を下ろして舟から群衆に教え始められた。話し終わったとき、シモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなさい」と言われた。シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と答えた。そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がか

## 第2回「山中湖の集い」 「人生の歩みと信仰」

かり、網が破れそうになった。」(ルカによる福音書5章1〜6節)。

これは、高校二年生のとき、僕が初めて教会へ行ったときの説教に用いられていた箇所である。当時、西南女学院に在籍していた姉に同行するという名目で、人生で初めて教会へ行くことが適ったのである。姉は向上心のある人であったから、西南女学院に一年ほど在籍したのちに国立の医学部へ編入してしまったが、不要になった聖書は僕が「勉強のため」という名目で譲り受けることになった。読むことを禁じられた聖書を取り戻したのだ。以後、高校を卒業し、西南学院大学の国際文化学部に入學してから、姉に譲ってもらった聖書で必修の授業を学んだ。人間の人生において、何が、どのようなかたちで役に立つのか、それは人の目には計り知れないものである。僕のその後の経歴は欠損だらけだが、その局面ごとに、「しかし、お言葉ですから」という前向きな思いに駆り立てられることがある。

この聖書箇所について、二〇一五年七月からたびたび通い、**その実質**的な母教会のように思っている篠崎キリスト教会の説教書庫から引用したい(なお、この教会の川口通治牧師は、学生時代に改革派教会で洗礼を受け、石原兵永の聖書研究会に通い、その後、海外赴任中の出会いのなかでバプテストに導かれた方である)。

・私たちは、自分の考えでいろいろなことを為そうとする。それが

うまくいかないとき、私たちは信仰が揺らぐ。そして言う「神は何故助けて下さらないのか」。しかし、必要なことは、自分の考えとは異なる指示を受けても、それに従っていく心だ。「お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」、その時、多くの収穫が与えられることを繰り返し経験することを通して、私たちは信仰者として成長していく。